

第6回京都市未来共創チーム会議 議事録

日 時：令和7年4月8日（火）15：00～17：20

会 場：梅小路公園 緑の館（1Fイベント室）

出席者：

安野 貴博	合同会社機械経営 CEO/AI エンジニア/起業家/SF 作家
池坊 専宗	華道家・写真家
大井 葉月	京都市職員（東山区役所）
大竹 莉瑚	市民公募委員
杉田 真理子	一般社団法人 for Cities 共同代表/都市デザイナー
田口 成人	京都市職員（環境政策局）
都地 耕喜	EVER 株式会社 代表取締役
仲田 匡志	株式会社 SOU 代表取締役/U35-KYOTO プロジェクトマネージャー
三川 夏代	株式会社メルカリ 『mercari R4D』

以上9名
(五十音順、敬称略)

1 開会

2 議事

(1) 第5回京都市総合計画審議会の結果共有

司会

本日の会場の梅小路公園は、平安遷都1200年を記念して整備された公園である。会場から見えている朱雀の庭は、京都の作庭の技術、粋を集めた庭と言われ、その奥のいのちの森は、あまり人の手をかけずに、自然の力での森の再生を試みている。本日は、京都の文化、歴史、自然、そういったものを深く感じられるこの場所で侃侃諤諤の積極的な議論していただきたい。

まず一つ目の議論に入っていく前に、西田都市経営戦略監から議題の趣旨説明をお願いします。

西田都市経営戦略監

本日、皆さんに序文を配布しているが、野村特別委員が、審議会でのいろいろな意見や、未来共創チーム会議でまとめた提言の内容などを受け止め、磨き上げて執筆した序文である。私はこの序文に非常に感銘を受けており、京都がこれから大切にしたい価値観や思想哲学のようなものが本当に込められた文章だと思っている。

これから議題の二つ目で、市民の皆さんにこの長期ビジョンをどのように伝えていくかを議論いただく。長期ビジョンは最終的に1万字を超える大作となり、それを市民の方に共有することはなかなか難しい。では、何を共有するのかというと、私は京都市のビジョンは序文に込められた3つの価値観を大事にしているということが、多くの市民の方、または京都に関わる方に伝わり、その価値観に共感するような輪が広がっていくことが、最も理想とする姿であり、そのようになって欲しいと思う。

本日は、序文の冒頭の6行の解像度を高め、そのイメージを皆さんに膨らませていただき、「京都はこういったことがある、このような価値観を大事にしている」ということを、それぞれ皆さんの経験や考えを共有いただく中で、このビジョンをより多くの人に伝えていく材料にできればと思う。今後、長期ビジョンの本文が示されるが、この序文がビジョンの顔になっていき、その序文の冒頭の6行を、より多くの人々と共有していきたいと思っている。その第一歩として皆さんのいろいろな意見を聞かせていただければと思う。

司会

本日は、序文や、第5回審議会に提出した「これからの25年、京都のまちづくりにあたって大切にしたい思想・価値観」と序文を紐づけた資料2に関し、各委員の活動や考え、経験などと結び付くところを2つのグループに分かれて共有するとともに議論していただきたい。

※各グループの議事録は別紙1

——グループ討議了——

司会

それぞれのグループでの議論を終えて、各委員の感想や思いを共有いただきたい。

仲田委員

「自然への感謝」という部分では、自然とのつながりで、特に序文の中での「人間は、自然に生かされ、自然に生きている」という部分についての違和感がテーマであった。都会に生きていると、自然の中に生きているという感覚は薄いですが、京都は伝統産業など自然を資本として商いをされている方であればわかりやすいという話をしていた。京都はどちらかというと文化という軸で自然とのつながりの営みがあると思うが、それは不便なことであり、例えば急須でお茶を入れると不便であるが、ペットボトルでお茶を飲むよりはおいしく感じるというような、便利なものを受け取ったことでそれらをどのように「回復」していくのかという話をしていた。

また、「回復」はなぜこの漢字を使用しているのかという話になり、英語で訳すと「Recovery」だが、そうではないはずであり、それであればこの「回復」が指すものを考えると、何か見えてくるのではないかと話していた。

大井委員

「回復」という言葉や序文の「不断の努力」という箇所について、いくつかの解釈ができることは、問いが生まれるような形となっており面白いと感じ、それは私たちが話していた「余白」の部分にもつながるのではないかという話になった。

三川委員

「回復」に関して英語にするとどうなるのかという話で、感覚的に「Recovery」ではなく、常用漢字ではない「恢復」が使われている意味が込められているのではないかと想像していた。

個人的にはお話したいことが2つあり、一つ目は、「過去に生かされ、未来に生きている」という部分で、その中でも「有名・無名を問わない無数の先人たちの献身があった」という一文に、あえて「無名」の記載が入っている点に共感していた。確かに歴史的には、有名な方のエピソードが残っていくと思うが、京都は長い歴史があるからこそ、教科書に載っていない様々なエピソードがあると思う。それを知ることは現代人にしかできなくて、そこに京都人の好奇心が働くと無名だったものが有名な歴史になって未来に受け継がれていくことができるかもしれない。そのようなワクワク感があり、好きな箇所であった。

二つ目は気になったところで、共同体の段落のところで、歴史と文化の段落や自然の段落は淡々と京都っぽい書きぶりであるが、共同体の段落は、「複雑で、繊細で、それゆえに愛

おしくてたまらない生身の人間関係」となっており、急に執筆者の生の感じが出てくる。ここは読み手のそれぞれのエピソードを思い浮かべて欲しいという問いかけの部分かもしれないが、それまでの書きぶりと大きく異なっているために違和感を持ったところである。

こちらのテーブルでの議論では、人間関係は決して愛おしさだけではないという意見があり、愛おしさ以外にも憎しみなどいろいろな感情があるからこそその共同体であり、「複雑」や「繊細」という表現だけではなく、もう少し要素分解することができるのではないかという議論になった。また、「生身の人間関係」についても、人間関係を築く上で、過去も現在も、手紙やほかのツールも含め生身以外の選択肢があるので、生身に限定する是非はあるのではないかという話になった。

安野委員

私も「愛おしくてたまらない生身の人間関係」という部分が気になった。愛だけではなく、「憎む」の部分、いわゆる「愛憎」と呼ばれるものについて、両方をメンションした方が良かったと思った。また、「私たちの日常を包んできたあたたかな息遣いのもと」についても、「あたたかな」を入れる是非について一考の余地があると思う。これもいろいろなスタンスがあるなかで、「あたたかな」と言い切ることをとるか、他の状態もイメージできるようにする選択肢もあるのではないかと思う。

また、「恢復」や「響創」という漢字は、私なりに起草者の気持ちを解釈すると、読みづらさが意図的にこの選択をしたということであり、おそらく、「恢復」は京都ならではの恢復を示したかったのではないか。さらに、固有名詞ではないが、この文章の中での準固有名詞ぐらいの引っ掛かりを作りたかったのではないか。「人間性の恢復」はいろいろな見方があるが、「京都の恢復というものはこういうものなんだ」という背景があるとこの字が生きてくると思いながら読んでいた。

大竹委員

共通言語が非常にあると感じている。こちらのグループの話し合いで、杉田委員が「詩的」と表現されていたが、私も同様に感じており、いろいろな方が読むビジョンが詩的で解釈がそれぞれに委ねられていることは素敵であり、それぞれの経験から生まれる解釈があり、許容度の高いビジョンで、取りこぼしが少ないと感じた。

また、これまでは抑圧してきた生き方について、これまで社会的に良しとされないと思ってきたものが、このような場では肯定してもらい、「合理的過ぎないもの」、「関係性を大事にする」「不便益」という話を自然と共通言語のようにできることが非常に嬉しい。

京都には独自の価値観があると思っており、言語化できるものと言語化できないものがあり、その空間で共有されている思いや、自然と浸透している価値観が丁度良いバランスの序文であると思った。

田口委員

もう1つのグループと論点がほぼ重なっていた。グループ内では、これを読んだ全員が理

解できる必要性について議論となり、全員が理解しなくても良いとすると語弊があるが、池坊委員の「日本国憲法は全員暗記していないけど、いろいろなものの根拠になっている」という認識は多くの人にあるのではないかと、個人的に共感できるものであった。

個人的には、共同体の段落の話で、三川委員と同様に、その段落だけ急にテイストが変わることが気になった。最後に問題提起だけをして議論が時間切れになってしまったが、「愛おしい」「あたたかな」という単語の表現について、これまで議論してきたケアやコミュニティの話がこのような表現に落とされているのではないかと推定したが、ケアやコミュニティをこうした感情と紐づけると、そうしたものに参加できない人が愛やあたたかみのない人ようになってしまい、少し危険なのではないか、と思った。どちらかというと、やむにやまれぬ関係性から、結果的にそのようなあたたかな関係性が生まれるような、憎悪も含めて愛情も出てくる話だと思っており、因果が逆なのではないかと個人的印象として思ったところである。

都地委員

全体的にこの序文を見て、見る人によって、目に留まるところは異なり、読んだことによって受ける影響も様々だと思った。例えば、共感や疑問、さらには、自分がどのようにありたいかという発見など、様々な影響を与え得る文章であると感じた。

特に、個人的には、自然の段落の「省みる」という言葉が好きであり、例えば「こうありたい」や「このような方針にします」という団体や企業があると思うが、その中で、私たちはそもそも自然を人間から切り離し、客体化してきたといった事実を省みて、どういった未来に貢献できるかというビジョンを示しているところが非常に大事であり、重要な要素であると思っている。

「省みる」ことは、人間だからこそできることであり、「省みる」ことができるからこそ、よかったところとよくなかったところをどのように活かすかを考えることができるので、この自然の段落は共感できる箇所である。この部分を考えていたときに、大竹委員や杉田委員との議論の中で挙げた、人間は自然の一部であって、自然を人間から切り離す必要はないということを改めて感じた。

池坊委員

私からは2点ある。1点目は、長期ビジョンの序文の冒頭の6行が非常に重要だと思うことである。序文や本文全体を市民の皆さんに通読してもらう必要はなく、ビジョンや標語などの象徴的な言葉が、長期ビジョンと市民を繋ぐ架け橋になり、それは、あらゆる人たちにとって人間性を回復するということに集約されていると思う。

また、先ほども、他の委員からの発言であったように、「回復」という表現について議論が必要ではないかと感じている。日本の国づくりの基礎を支えている日本国憲法においても、憲法を全部読んだことがある人はあまりいないと思うが、憲法第13条の前段において、「すべて国民は、個人として尊重される」という一文があり、個人を基本として国づくりを行っ

ているというシンプルな一文が複雑な法律においてベースとなっているということを考えると、序文の「人間性を恢復する」という箇所について、もう少し標語のような、シンプルな形の方が、より多くの人を包含できるのではないかと考える。一方、私たちと市民と協働のあり方によって補完していくものでもあるので、序文の冒頭の6行が非常に重要であると思うことが一つ目である。

二つ目は、自然の段落であるが、これは非常に素晴らしいと思っており、京都に限らず、北海道も沖縄でも、自然はそこかしこにあるとは思いますが、京都は、自然と歴史が人の営みのいろいろなところに織り込まれており、京都と自然の関係における特殊なところかと思う。例えば、京都の井戸水の柔らかさを求めて、移住して料理店を開く人もおり、また、昔は川沿いで織物を洗っており、今は洗っていないが、水のありようはいまの織物にもつながっている。民家に井戸が掘ってあったり、五山に送り火をするという伝統が根付いているなど、自然と人の暮らしや、手仕事など、そういったものが自然と織り込まれているところが、京都ならではのあり、序文の「服飾、建造物、そして町並みまでもがこの水脈と土壤に根差している」と明記している部分について、改めて自然が我々の中に息づき、自然と人が包含し合いながら生きているということを読み取ることができ、良いと思った。

杉田委員

自然に関する都地委員の話が非常に興味深く、合理化を突き詰めていった先ではない世界観の話であり、不便益という言葉も出てきた。最近、私は活動拠点において、葉っぱが落ちすぎて掃除をしなければいけないことや、そこでお隣さんとの関係性が発生したり、怒られたりしているが、そのようなものがない方がクリーンで合理的で楽ではある一方、そこで発生するコミュニケーションがなくなってしまう。便利ではないが、そこから生まれる生活みtainなものが、個人的なエピソードとして京都らしいなと思いながら、先ほどの議論に参加していた。

また、もう1つのテーブルの発表の際に、英語に翻訳したときの話が出てきていたが、同じような話をこちらのグループでもしていたことが非常に印象的であった。私たちは、日本語のネイティブとして行間を読み、かつネイティブの人からしたら重箱の隅をつくような部分について議論ができる関係でディスカッションをしているが、そうではなくなったときにどのような議論が生まれるのかという点について、非常に多くの可能性があると思う。一人ひとりの翻訳の仕方があるかもしれないし、未来共創チームのそれぞれで英訳をしても全く違ったものが出来上がり面白いかもしれない。

今朝、フォースプレイスに関する記事を読んでいた。サードプレイスの時代はありつつ、フォースプレイスはデジタル空間も含めた新しい在り方というところで賛否両論あるが、その関連で先ほどの議論の中で、生身の人間関係だけではないという点について面白い議論だと思って聞いていた。あたたかな人間だけではなく、ピリピリとしたり、憎悪の感情があっても良いというところに、未来共創チームの議論らしいと思っていた。

(2) 長期ビジョン（仮称）の周知に向けた取組について

司会

それでは議題2について、まずは事務局から説明をお願いします。

荒木都市経営戦略室長

（資料に基づき説明）

京都市の未来を紡ぐチーム（大松氏、大野氏）

（資料に基づき説明）

司会

長期ビジョンを市民に対してどのように伝えていくかということについて、アイデアや御意見をいただきたい。

安野委員

私は、AI の活用が考えられると思う。例えば、この序文を読んで「何か質問をしたい」、「自分はこう思った」、「これは違うだろう」と言いたい人が出てくると思う。その時に、質問ができる窓口があり、回答する AI に私たちの議事録を全部読ませておき、未来共創チーム会議において議論になった答えを返せるようにしておくと、質問した人の理解が深まり、一つ目の良い点ではないかと思う。

二つ目の良い点としては、AI に対してどのような質問や意見が寄せられたかをうまく収集しておくことで、「実はこの意見が多い」、「取り組んでいなかったが、この観点は確かに重要である」ということを、未来共創チーム会議や事務局側が発見することができ、また市民との対話ログも非常に重要な資産になる。

AI を作って公開することは、大変難しく思われるかもしれないが、現在はそのハードルが非常に下がっているので検討いただきたい。私もちょっとしたオープンソースのソフトウェアを作っているので、そこから流用できる部分もあるかもしれない。

三川委員

先ほどこちらのチームで話していたのは、例えば「自然への畏敬と感謝を抱けるまち」を理解してもらうことは難しいが、それをわかりやすく伝えるために、仲田委員から、「いただきます」と換えられるのではないかというアイデアをいただいた。他にも「自他の生とともに肯定し尊重し合えるまち」は「いいね、ありがとう」、「歴史と文化を介して人間性を回復できるまち」は「ワクワク」と置き換えられる。このように、誰でも分かる言葉に置き換えて、シンプルにしてしまう方法もあるのではないかという議論になった。

仲田委員

簡単にすることは大事だと思う。本日の議論ではないが、何のためにどれだけ浸透させるかを明確にした方が議論はしやすいので、何のために浸透させたいのか、誰にどれだけ届けるのかについては要件を整理したい。

また、簡単にするためには、日常の中にある言葉で、この長期ビジョンを扱えるようにすることが重要である。幼稚園児や小学生も京都市民なので、子どもたちがしていることを長期ビジョンで例えとこのようなことだと置き換えられると面白いのではないか。

先ほどの安野委員のアイデアについて、京都市の長期ビジョンでは、「この問題をこのように答える」という形を、学校教育やスタートアップ等の事業をつくっていく方々が活用すれば面白いと思う。

池坊委員

言葉も大事だが、実践や運用、自分たちが体を動かしながら共有していくことが大事である。お茶やお花の体験を通して多様性を感じていくのもよい。あるいは、伝統工芸の職人さんの現場を見たり、井戸水を飲んだりしてみるなど、いろいろな形で京都が受け継いできたものをシェアしていくことは重要である。体験することで垣根も払われるので、そのような体験型が必要である。

また、総合的で、分かりやすく伝えるためのページも必要だと思う。ウェブ上の特設サイトは意見を吸い上げるためのページだが、アンケートにもあったように、BE KOBE のウェブサイトは非常に分かりやすい。港町ということ、そして阪神淡路大震災があったということが神戸市民にきちんと届いており、共感しない人はあまりいないのではないかとというぐらい、中身のあるページである。この25年の長期ビジョンそのものについても、知らない人が大半だと思う。京都には長い歴史や様々な由縁があり、25年ごとに悩みながら、答えはないが考えて作っていった。そして、今また新たに作ろうとしていて、それを皆で担っていかしていることをしっかり伝えるための、メッセージ性がある1つのシンプルなサイトがあってもよいと思った。

伝えるためのページは万人に届けるためのものだが、それと並行して、様々な小さなローカルのコミュニティやワークショップなどで、意欲のある市民の皆さんが集まって、例えば序文の冒頭の6行をテーマに考え直すのも良いと思う。そこでは、これが25年のビジョンだと押し付けるのではなく、答えは出ないかもしれないが、自分なりの答えを探すプロセスを小さな集まりで実施していくことが重要だと思う。私たち未来共創チームの解釈や文章も1つの答えではない。私たちが辿ってきたプロセスを辿り直してもらおう。私たちも答えはあまり出なかったが、そのように議論をして、様々な意見があることを肌で感じて、血肉にする場を小さくても増やしていけば、それが1つの種となり、その人を中心に、またローカルなコミュニティが強まっていくのではないか。

従って、BE KOBE のような伝えるサイトで万人に向けて発信しつつ、集まってくれる一部の方だけで、ローカルな場で議論をやり直すという両輪で長期ビジョンの浸透を図る方法もあるかと思う。

大竹委員

先ほど仲田委員がおっしゃっていて、私も先ほどの議論の時に話したが、長期ビジョンは、現行基本構想の25年の計画期間が満了したから策定すると思うが、そもそもビジョンの立ち位置や、なぜこのビジョンを考えたのかということ、私たちの中で整理した方がよいのではないか。長期ビジョンの目的や立ち位置が分からなければ、浸透させる必要性や、誰に対して浸透させるのかが見えてこない。とりあえず市民に知ってもらいたいという前提でスタートをしているが、この文章自体は、多くの市民にとって難しい表現であるという話もあった。どのようなところにどのように広げていくのかという方法を考える前に、浸透させる目的や、これを基に行政が政策を考えていくのであれば、そこまで市民に向けた発信が必要なのかという議論もあると思うので、もう一度このビジョンの立ち位置を整理したい。

それを一旦おいて、やりたいこととしては、出来上がったビジョンを皆のものにしていくということ。最終的に出来上がったビジョンだけではなく、そこまでの過程を見てほしいと思い、Notionを用いて共同編集をし、記録を取ってきた。その過程がもう少し見てもらえるようにまとまってほしいので、先ほど話に挙げた専門サイトを作ることには賛成である。こういったサイトは一方的な情報発信になりがちだが、安野委員がおっしゃったようにAIを活用することで、もう少しインタラクティブな関係性をサイト上で作ることができると良いと思う。

また、私もワークショップをやることは良いと思う。私は高校の授業に行くことが増えるので、探究学習の時間を使ってやってみたい。他にも、年配の方が集まる地域のカフェがあるので、そこに持っていくとどうなるのか個人的に気になるので、聞いてみたい。これらは私にできそうだと思う。

以前も話したが、ラジオなどのメディアで伝える方法もあるかと思う。他にも、ZINEという個人が自由なテーマや手法で制作する冊子があるのだが、そういった自分の個性や趣向を全面に出したアウトプットをする方法もある。これまでのようにきれいにまとめられた文章ではなく、レイアウトを工夫したり、感想を入れたりするなど、様々な表現を駆使することが良いと思う。

杉田委員

私が1つ大切だと思うのは、SDGsや日本国憲法などもそうだが、誰もが自分たちの分かりやすい言葉に翻訳できることである。それは英語などの言語の話だけではなく、例えば子どもや高齢者、大人といっても、いろいろなセグメントによって伝わる言葉と伝わらない言葉がある。それぞれの人に合った翻訳というか、分かりやすくできる余白があれば、自然と浸透していくのではないかと。

以前の未来共創チーム会議において、日本国憲法の大阪おばちゃん語訳の本があることをお伝えしたが、書かれている内容自体は同じだが、それを大阪のおばちゃん風に解釈するという本である。このようにバージョンがいくつもあると、あなたならば、このバージョンが一番分かりやすいのではないかと、提示できるのではないだろうか。全ての言葉を分かりやすく翻訳する必要はなく、その人によって分かりやすい言葉は異なるので、共通の回答を1

つ作るよりは、いろいろな人に合わせたものを作る発想である。

もう1つが、超長期目線の話をしているので、現代の市民にどのように浸透させるのかという話はもちろん大切だが、未来の市民が、どのように私たちが今考えていることを読んで理解するのかということにも、私は興味がある。

建築の分野では、例えば100年後に解体されることが前提の建物の資材には、解体する人が分かりやすいように、コードを書く取り組みがある。他の分野においてもあると思うが、現代の私たちが培ってきたものを受け継ぐ次の世代の人たちが、どのようにそれを受け取り、理解するのか。ゼロから新しいものを作り直すのではなく、このようなプロセスなども血肉にして、新しい議論を積み重ねていくのかということは、非常に重要である。その点では、未来共創チーム会議の場で悩みながら考えている時間も含めて、議事録を漫画化したり、音声として残したりするなど、思考のプロセスが残っていることも大切なことではないか。

また、ゲーム化することも楽しそうだと思う。SDGs などでも、理念を広めるためにゲームにして、いろいろな地域に持っていくという国連の取組も聞く。私の知人も京都のごみ問題を知ってもらうために、ボードゲームを作っている。他にも、会話を創発するためのソーシャルゲームのようなものもある。知人のアメリカ人が働いていたバーでは、机に必ず問いが書かれており、目の前の知らない人に、絶対にその質問をしなければいけないという遊び心のある仕組みがある。例えば、街中のベンチやバス停などに問いを書いておくなど、遊び心のある形で市民にアプローチをするのも面白いのではないか。

大井委員

私は区役所職員として地元の方に行政の情報を届ける中で、地道な取組が必要だと感じている。デジタルツールの活用も必要だが、高齢化社会においては、アナログな手法や、対面での取組も重要である。長期ビジョンを授業の一環で扱ったり、ラジオを活用したりするのも良いのではないか。

田口委員

私は、長期ビジョンを読んだ人の行動がどのように変わるのかということが重要だと思う。その時に、全文を読んでもらう必要があるかということ、必ずしもそうではない。私たちが議論してきたものを感覚的に共有できるのであれば、それは伝わったという判断になるのか。そうであれば、ゲームやお茶、お花、ラジオなども全て手段として考えられる。池坊委員がおっしゃったように、万人に向けて実施する取組と、ローカルで実施していくものは、分けて考えた方が良いと思う。AI を活用し、数を集めることも必要だと思う一方で、長期ビジョンを受け取った人が行動に移していくには、もっと局所的に何かの場で考えなければいけないので、両方の取組が必要となる。

また、長期ビジョンを読んで行動を変えることはなかなか難しいが、参加の感覚は大事である。例えば、お店をつくる時に、壁を塗ることを手伝うと、そのお店に行きたくなるような感覚を長期ビジョンの取組でも作れないだろうか。杉田委員の、様々なバージョンを作るというアイデアに追加して、それをいろいろなところで作ると、それに基づいて、自分の行

動も変わるのではないか。

もう1つ付け足すと、1つの行動を皆でする時に、目的を揃える必要は必ずしもない。例えば、環境問題などでは目的を揃えようとする、うまくいかなかったりする。そうではなく、人に会いたいだけの人や、作ったお菓子を食べてほしい人というように、参加の目的は多種多様のままでよい。未来を紡ぐチームの広場での取組も同じで、ラジオもそうだが、もう少しチャンネルの種類を増やすのも1つある。

都地委員

私は、分かりやすくすることと、それでも最初は分からないとしても、身近にすることが非常に重要だと思う。特に教育は重要である。25年後といえば、小学生も30歳代になっている。これからの労働生産人口を担っていく人たちに対して、義務教育課程の段階から下敷きなどを渡すのも良いのではないか。最初はこれが何なのか分からないが、成長していくうちに徐々に理解できるようになるかもしれない。

私たちにも、長期的に浸透させる目線が必要である。その点では、杉田委員のアイデアが大変面白い。公園や階段、建物の中に英語や日本語で、序文の一部を掲示し、皆さんに考えてもらおう。そうすることで、長期ビジョンを目にする機会も増え、自分自身が何を考えるべきなのかというところに行き着く機会にもなり得る。従って、何かしらの事象を認知して、行動を変えるより、日常生活の中で、発見や気づきがあり、そこから腑に落ちて、行動が変わっていく方が自然的なのか、それとも京都的と言ったらよいのかは分からないが、私はそれが良いと思う。

三川委員

2点付け加えたい。1点目は、これはあくまでもビジョンなので、実現するものであるということ。実現する主体が京都市民であることを考えると、伝えるだけではなく、皆さんがおっしゃるとおり、いかに考えてもらうのか、いかに行動してもらうのかということが重要である。伝えるよりも、考えてもらい、行動してもらうところに重きを置きたいと思う。従って、先ほども出たように、問いを投げかけたり、授業で扱ったりすることは非常に良い。

2点目は、ビジョンの文章はもしかすると26年後、100年後、1000年後に生きる可能性があるということ。あくまで私たちが話し合っているのは、2025年に生きている京都市民の解釈でしかないと考え、2030年に生きている人たちは、どのように解釈するのかということも重要である。従って、問いかけ、考えさせる機会は、サステナブルに積み重なっていくものである。このビジョンの読み解き方の積層をアーカイブ化し、タイムラインで見ると変遷が見えてくる。そうすることで、京都ビジョンを皆のものにし、皆で育てていくことの、「皆」という主語が現代人だけではなく、未来に生きる人も含められると思う。

では、それをどのように積層するのか、何を積層するのかと考えると、先ほど話していた問いを投げかけることも大事であり、投げかけた問いに対して、市民の人たちがどのように感じたのかを、どこかに集約させる必要がある。しかも、それがパブリックな状態で見える

必要がある。タイムカプセルは埋めた子たちだけのものだが、タイムカプセルのようにどこかに期待が集まり、それをきちんと積み重ねるように、例えば2025年で京都ビジョンにふさわしいものは何かということを市民に呼びかける。これがあるという代表作を2025年の京都のものとして閉じ込めておく。これを毎年繰り返していくと、このビジョンの読み解き方の、言葉には表れない議論が、これは京都っぽいという曖昧なものとして、どんどん集約されていく。そして、ふと未来の人が見た時に、京都っぽさはこのようなものなのかと時代を越えて、読み解いてくれるのではないか。

従って、その年の京都っぽいものがタイムカプセル化されていく場所があると面白い。しかも、それが物だけではなく、においや音などを五感で感じ、今年の京都はこのような感じだったと分かるものである。例えば今年の桜が非常にきれいだったならば、桜の花びらを閉じ込めておくだけでもよいと思う。このような面白いタイムカプセル化もよいと思った。

司会

三川委員が「長期ビジョン」ではなく「京都ビジョン」とおっしゃった。先ほど池坊委員から神戸市の「BE KOBE」の話があったが、そのような名称は考えた方が良いだろうか。

大竹委員

先ほどは、ビジョンがどのようなものかを整理する必要があると言ったが、ビジョンとなると遠い感じがする。皆さんのお話の中でも、市民の行動変容とまでは行かなくても、どのように当たり前になっていくか、市民のものにしていく感じである。それならば、別にビジョンでなくていい。「ビジョン」という名称であっても、それをわざわざビジョンとして伝える必要もない。従って、ビジョンか何か分からないが、序文のここだけを切り取って、急に駅などに貼ってみる。これは何だろうという引っかかりを散りばめておき、これはビジョンなのだと後から気付いてもらう方法もある。ビジョンを「ビジョン」として、そもそも出すことが適切なのか考えてみたい。

また、三川委員がおっしゃったように、育てていくものかと思う。今で終わりではない。人がいて、時間軸があって、出来上がっていくものである。従って、出来上がっているのに未完な感じが非常に良い。来年、再来年以降も含めて、このビジョンが「ビジョン」になっていくと思う。

三川委員

ビジョンというより行動指針のようなものだろうか。何かやろうと思った時に、京都市民として、どのように振る舞えばよいのかという判断基準になりそうである。ビジョンというよりもコードに近いかもしれない。

仲田委員

京都の美意識、美学とも言えるのではないか。

都地委員

そのような原理原則、デザイン原則のようなものが何となく頭にある。

司会

本日の議題はこれで終了する。最後に西田都市経営戦略監から一言お願いする。

西田都市経営戦略監

本日も長時間にわたり御議論していただき感謝申し上げます。本当に様々な意見があり、このような議論を積み重ねていくことが重要だと改めて感じた。この場の議論については、議事録として公開され、今後に残っていく。

長期ビジョンの全体像をまだお示しできておらず、序文だけで議論していただいたので、イメージしづらい部分もあったかと思う。事務局としては、長期ビジョンの中で、共感できるポイントを見つけ、どうすれば伝えられるかということを、今後皆さんと考えていきたいので、引き続きよろしくお願いします。

司会

以上をもって、第6回京都市未来共創チーム会議を閉会とする。